

脱皮と追い風

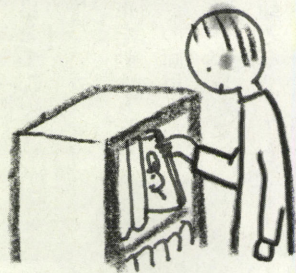
●自分の中から自分が生まれる

お金の好きな王様と、ドレスの好きなお妃に、念願の男の子が生まれてみると、ロバでした。王子は人間の服を着せられて教育を受けましたが、いつも独りぼっちでした。ロバのひづめで苦勞してリユートを習い、両親のために歌をつくって捧げると、「大変よいが、私は忙しい」と追い払われます。王子は人間の服を脱ぎ捨て、ロバの姿で旅に出ました。

松井るり子

長いさすらいの間に、美しい自然の音を自在に奏でられるようになった王子が、たどり着いた城でリユートを弾くと、その城に住む王と王女の心は「緑の丘を越えて、はるか遠い世界の果てへと続く道」へと運ばれます。ロバの王子の歌に、王女はうっとりしたり、笑いころげたりしました。

しばらくして、王女の花婿候補の王子たちの来訪があると聞き、ロバの王子は城を去ることにします。別れの歌に泣きだした王女を「僕がいなくなっ



ても、歌は思い出せる」と慰めると、王女は「歌よりもあなたが好き」と言つて、地団駄じだんだを踏みました。するとロバの皮が脱げて、りりしい王子が立っていました。王女は「そんなことなら、初めから知っていた」と言いました。

バーバラ・クーニーの描くグリム童話『ロバのおうじ』（ほるぷ出版）には、このように描かれます。二人は結婚して、六人の子どもに恵まれました。

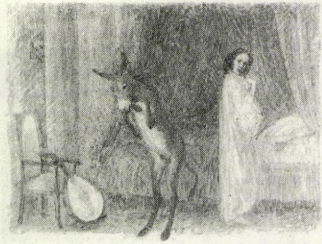
子どもに手がかからなくなつても、お金は遠慮なくどつさりかかるし、それが終わつても、彼らにまつわる思い煩いは、消えてはくれません。それどころか、問題は複雑に、深刻さは増すばかりです。彼らの訴えは、親にとつては理不尽ですが、その意味を翻訳してやれば、結局のところ「古い服は自分にはもう合わない。脱がなきゃやつてられない」と、言っている気がします。

この王子様の場合、親に着せられていた立派な服は、ロバの姿を隠すためのものでした。親を見限つた後は服を脱いで、ロバに戻つて家を出ました。その姿のままに好きな人に受け入れられた時、ロバの皮が脱げて人間になり、結婚しました。最初の脱皮は、親と親にまつわるごまかしを脱ぎ捨てる形でなされ、二度目の脱皮は、自分と自分の出生にまつわる因縁を脱ぎ捨てる形でなされました。どちらも、痛かつたと思います。王子は、よくやりました。

子どもが、着慣れた皮の中に隠された、次のステージの自分を誕生させようとする時、まずは内から爪穴を開けて、引き破ります。それから、皮をはがすように手荒に脱ぎ捨て、さらには古い皮を焼き捨てなければなりません。

そんな手続きを子どもたちが進めてゆく時、親の目には、これまでせっかく与えてやつたよい物を、ずいぶん乱暴に破壊する反抗的態度と映つて、大変

シーン①



シーン②



シーン③



シーン④



『グリム童話集』(西村書店)
p.30-31 から引用

腹が立ちます。怒るのも大人げないので、夫と二人して「いま、この子は『はんこ置き(反抗期。護身のオヤジギャグ)』だからね」「仕方ないね」「まだまだだなぁ」と、さもわかったような顔をして、本人の前でうなずき合ってやるのでした。

●王は無用の皮を焼く

リディア・ポストマ絵『グリム童話集』(ウイールヘルム・菊江訳、西村書店)の「ロバの王子」は、

魅力的な大人の絵本です。この絵本の中では、グリムの語り口に忠実に、王女はロバの姿のままの王子を、夫にします。婚礼の夜に父王は「ロバの王子がいつものように礼儀正しくふるまうか、心配」になり、けらいに寝室を探らせます。

四つのシーンに分けて、モノクロで描かれる夜は、こんな感じです(右の挿絵参照)。

①ロバがリュートを置く。ベッド脇に立つ姫が、白いドレスを脱ぎようとしている。

②王子がロバの皮を頭から脱ぎにかかる。姫はシーツの間に裸で横たわって、半身を起こし、背中越しに振り返る。

③大変美形の人間の若い王子様が、腰から上の裸体を現す。

④けらいが、ベッド脇の床に落ちたロバの皮を気にしながら、寝室からコソコソと出てゆく。

二人が寝静まった後、王様はこっそり寝室に忍び込み、娘の夫が人間の若者であることを確認すると、ロバの皮を拾ってきて、火の中に投げ込みました。何と大胆な父親でしょう。娘夫婦の寝室を探らせ、自分でも乗り込み、ものを取ってきて焼いてしま



まうとは。常識から外れるこんな行為が、すべて「表面に出る」親が、いるんですね。子どもが寝ているかもしれないと思って、

ノックを遠慮して携帯電話に「ごはんできた」とメールしてやるような配慮さえ裏目に出してしまう私は、確信に満ちたこの父親が、うらやましいです。この王様はきつと相当の権力者で、その権力を正当に行使してきた人なのでしょう。

②の絵を見ていたら、目をつむったロバの胸辺りの皮の破れ目から、ふんばり顔で王子が出てくるどころが、まさに出産だと思いました。脱ぎ捨てた「おふくろ」を再び着用しないように焼き捨てるのが、王の役目と読めるかもしれません。成長したいという願いに突き動かされている子どもにとって、昨日までずつとやってきたロバとしての振る舞いを明日も続けるほうが楽なのに決まっています。だからこそ、焼き捨てるほど過激な、ロバの皮との決別が必要だったのでしよう。

息子にとって「おふくろ不要」の時期がきたことを、少ししじめに考えてみることにします。

●「拒否」から「むんずとつかむ」まで

結婚を申し込むために、はるばる旅してきた殿方たちを、はねつけるだけでは飽き足らず、「この私」に求婚してきた身の程知らずの罰として、殺さねば満足しない姫が、お話の中にはたくさんおいでです。相手の身分が高いという客観など、説得力になりません。この私の主観にイエスと言わせてごらん、というわけです。大勢の男たちが、自分のせいで死んでゆくことの残酷に、気づこうとしません。

出久根育が絵を描いたグリム童話、『あめふらし』（パロル舎）の、絵の中にコロロンと転がる不思議な数字、これは何？ と考えてみれば、おおそうだ、串刺しにされた男たちの首の数。お話の世界って、グロテスクなのよねーと思いを巡らせば、いやいや現実世界もグロでは負けておらんわ、と気がつくのでした。

姫は世界じゅうを見渡す12の窓のついた塔もついていたので、隠れた男を必ず見つけられると自信满满。求婚勝負のかくれんぼに挑んで負けた男たちの首をはねては、串刺しにして99個も並べていました。100番目の挑戦者の見目麗しい若者は、アメフラシに変身して姫の髪の中に隠れていたもので、どの窓からも見つかりませんでした。

ナメクジに似たアメフラシが、髪に潜んでいたとわかった時の、ギョツとする感じと悔しさと怒りは、容易に想像できます。姫はアメフラシをつかんで床に投げつけました。こっそり人の姿に戻って王女と結婚した若者は、自分の隠れ場所を決して打ち明けなかったもので、王女は夫が自分より優れていると思つて尊敬しました。

気味の悪いアメフラシを、なにも自分の手で「むぎゅう」とつかまなくても、髪をほどいて、腰元に振り払わせれば触らずに済むのに、よほど怒つてい

たのでしよう。殺してでも男を寄せ付けない潔癖症の姫を妻にしたこの若者の勝因は、冷静ならば決して触れない、ぬるべたつとした生き物を、姫本人の素手でつかむよう、仕向けたところだと思います。

その時の生々しい感じを、読み手に想像させることで、さらに考え過ぎな方向への想像力をもたくましくさせてくれます。この若者は、99人の男を殺した姫など、ほんとに欲しいのでしょうか？ 欲しいのでしょうか。 「失敗者リスト」が長いほど、成功者の達成感と勝利感は大きいのでしょうか。王子たちの権力欲をあおり立てる魔性の姫ごみ、恐るべしです。

自分の子が「魔性」にフラフラッとなりかけている時、あなたが99の死体の一つになるのは明らかだから、やめときなと言ってやりたくありませんが、言って聞くわけありませんよね。最初の成功者になれる可能性に、望みをかけると決めて「われこそ

は」とのぼせている者に、親の阻止など追い風です。親ってほんとに、出番がないのだと思います。

恋ではなくて、大学入試なんです、まあ、あれも恋みたいなものかもしれません。だめだった時に悲しいし、インターネットでほぼ同時刻にわかるんだから、合格発表なんか見に行くなど止めたのです、うちのおつちよこちよいが、どうしても行くと言って聞きませんでした。県境を二つ越えて見に行って、だめでした。「ほらー」と勝ち誇る気には当然ならず、平凡な慰めの言葉も浮かばず、ただひたすらかわいそうでした。せめて「発表を見に行くな」などという追い風を、吹かさなければよかったです。思った時は遅かったです。

要するに私は何の役にも立たなかつたわけですが、いつかはわが子も本当に必要なものを、むんずと自分の手でつかむまで成長してくれることと、期待しています。

(文筆業)